

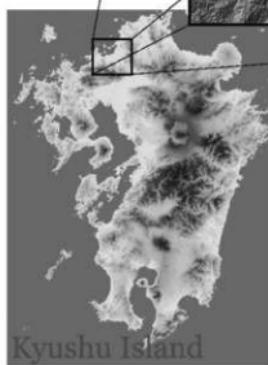
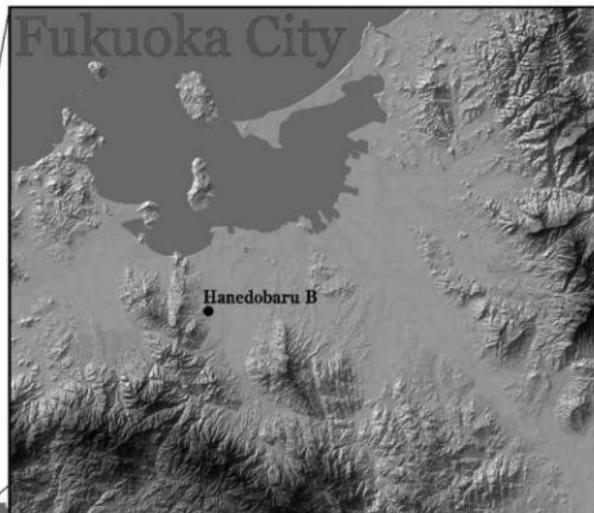
はねどばる
羽根戸原B 1

－第3次調査の報告－



福岡市教育委員会

はねどばる
羽根戸原B 1
－第3次調査の報告－



調査番号 0810
遺跡路号 HNB-3

2010

福岡市教育委員会

序

福岡市は、豊かな自然環境と地理的条件に恵まれ、古くから大陸の先進文化を受け入れる窓口として栄えてきました。市内には最古の稻作の村である板付遺跡、古代の迎賓館である鴻臚館、貿易都市博多などをはじめとする貴重な文化財が残されています。福岡市教育委員会では、開発工事に伴いやむを得ず失われていく埋蔵文化財について、事前に発掘調査を実施し記録による保存と保護を行うなど、その保護に努めています。

今回の発掘調査では、弥生時代・古墳時代の集落遺跡が見つかり、地域の歴史を解明する上でたいへん貴重な発見となりました。

本書が市民の埋蔵文化財に対する理解を深めるための一助となる、学術研究の分野で役立つことができれば幸いです。

最後になりましたが、発掘調査においてご協力を頂いた株式会社ユニホーをはじめ関係各位に厚くお礼申しあげます。

平成22年3月23日

福岡市教育委員会
教育長 山田 裕嗣

例　　言

- (1) 本書は、福岡市教育委員会が平成20（2008）年度に西区野方3丁目212番他で実施した発掘調査報告書である。
- (2) 発掘調査は福岡市教育委員会が行い、調査担当者は加藤隆也である。
- (3) 遺構実測、写真撮影は加藤が行った。
- (4) 出土遺物の整理作業は加集和子が行った。
- (5) 出土遺物の写真撮影は加藤が行い、浄書は加集が行った。
- (6) 本書に使用した方位は磁北であり、今回の調査・報告に係るレベル値は壱岐南小学校内ベンチマーク（標高11.848m）を使用している。
- (7) 調査に係る記録類、出土遺物は埋蔵文化財センターで収蔵・保管し、活用されていく予定である。

遺跡調査番号	0810	遺跡略号	HN B-3
地　　番	西区野方3丁目212,213番1,218番1,637番2	分布地図番号	戸切 92
調査対象面積	3,138m ²	調　　査　面　積	1,402m ²
調　　査　期　間	平成20年4月25日～平成20年7月4日		

本文目次

第Ⅰ章 はじめに		第Ⅲ章 調査の記録	
1. 調査に至る経緯	1	1. 調査の概要	5
2. 調査の組織	1	2. 遺構と遺物	5
第Ⅱ章 遺跡の立地と歴史的環境	2	3. まとめ	18

挿図目次

Fig. 1 周辺遺跡分布図(1/7,500)	3
Fig. 2 羽根戸原遺跡第3次調査地点図(1/700)	4
Fig. 3 羽根戸原遺跡第3次調査遺構配置図(1/160)	折り込み
Fig. 4 S C-O1, O2遺構実測図(1/40)	7
Fig. 5 S C-O3, O5遺構実測図(1/40)	8
Fig. 6 S C-O4遺構実測図(1/40)	9
Fig. 7 S C-O6, O7遺構実測図(1/40)	10
Fig. 8 S C-O8, O9遺構実測図(1/40)	11
Fig. 9 S C出土遺物実測図(1/3)	12
Fig. 10 S B-O1, O2遺構実測図(1/40)	14
Fig. 11 S B-O3, O4遺構実測図(1/40)	15
Fig. 12 S B-O5遺構実測図(1/40)	16
Fig. 13 S K-42遺構実測図(1/40)	16
Fig. 14 S B, S D, S K, S P,表探遺物実測図(1/1, 1/3)	17

図版目次

PL. 1 調査地点全景(航空写真) 2008(平成20)年2月19日撮影	
PL. 2 1)西側調査区全景(南西から)	2)西側調査区全景(北東から)
PL. 3 1)東側調査区全景(南西から)	2)東側調査区全景(北東から)
PL. 4 1)S C-O1掘削状況(南東から)	2)S C-O2掘削状況(南東から)
3)S C-O3掘削状況(西から)	4)S C-O4掘削状況(南から)
PL. 5 1)S C-O5掘削状況(東から)	2)S C-O6掘削状況(北から)
3)S C-O7掘削状況(西から)	4)S C-O8, O9掘削状況(南西から)
PL. 6 1)S B-O1掘削状況(南から)	2)S B-O2掘削状況(南東から)
3)S B-O3掘削状況(西から)	2)S B-O5掘削状況(東から)
PL. 7 1)S P-39掘削状況(南から)	2)S K-42掘削状況(南から)
3)昭和23年米軍撮影空中写真(USA-R236-46の一部を使用)	
PL. 8 出土遺物(縮尺不統一)	

第Ⅰ章 はじめに

1. 調査に至る経緯

平成19年11月13日、株式会社ユニホーより西区野方3丁目212、213番1、218番1、637番2における宅地造成に先立って、埋蔵文化財の有無についての照会が埋蔵文化財第1課事前審査係に提出された。計画地は、周知の埋蔵文化財包蔵地である羽根戸原B遺跡にあたり、平成15年11月11日に試掘調査を行い集落遺構の存在が確認されている地点であった。協議を重ねた結果、発掘調査により記録保存することになった。発掘調査は平成20年4月25日から測量と表土剥ぎ作業を始め、同年7月4日に全ての調査を終了した。

発掘調査から整理・報告にいたるまで、株式会社ユニホーをはじめ関係者の皆様のご理解と共に、多大なご協力を賜り順調に作業が進み報告書を作成することができました。ここに記して謝意を表します。

2. 調査の組織

調査の体制は以下のとおりである。

調査委託者	株式会社ユニホー		
調査主体	福岡市教育委員会	教育長	山田裕嗣
調査総括	文化財部埋蔵文化財第2課長	力武卓治（前任）	田中壽夫（現任）
	埋蔵文化財第2課第1係長	杉山富雄	
事務担当	文化財管理課	井上幸子	
調査担当	埋蔵文化財第2課	加藤隆也	
調査作業	芦馬光夫 岩永いさ子 川嶋京子 倉光アヤ子 倉光京子 倉光政彦 倉光やえ子 小柳和子 柴藤清志 田原忠昭 西鶴ムラ子 西鶴洋子 野田英機 細川虎男 松尾和子 宮原邦江 柳井順子 横溝恵美子 吉積百合子 脇坂ミサヲ 脇坂レイコ		
整理作業	加集和子		

第Ⅱ章 遺跡の立地と歴史的環境

今回の調査地点から見下ろせる早良平野は、西側を背振主稟から北に派生した西山・飯盛・高祖山地に、東側を同じく北に派生する袖山山地と更に北に延びる飯倉台地によって画され、中央部には背振山地を源流とする室見川が北流し、博多湾へと注いでいる。平野の北辺には姪浜をはじめとする第三紀層の小丘陵群が散在し、これらを繋ぐように砂丘が形成され、背後には沖積低地が広がっている。また、両山地の山麓部や平野中央部には中位段丘下位面が残され、小田部台地にはこの上位に火山灰層が残存している。低位段丘の多くは室見川の扇状地平野・三角州平野部に埋没している。

早良平野の旧石器時代は各遺跡から表面採集の遺物が知られており、有田遺跡の調査では石器包含層が検出されたほか、吉武遺跡群の調査でも出土している。縄文時代では、草創期から中期の遺跡はいまだ不明確であり、後期を主体とする四箇遺跡の調査が最初である。平野の沖積低地部では夜臼式単純期から弥生時代初頭の初期農耕期の遺跡が多く、室見川東岸に有田遺跡・有田七田前遺跡・免遺跡・次郎丸遺跡、西岸では橋本一丁田遺跡・牟多田遺跡・拾六町平田遺跡・拾六町ツイジ遺跡・石丸古川遺跡・湯納遺跡が分布する。有田七田前遺跡では多量の夜臼式期の遺物が、有田遺跡では台地上に弥生時代初頭の環溝集落が、免遺跡では平野内で最古の突帯文期の土器が多量に出土し、橋本一丁田遺跡では夜臼式単純期～弥生時代初頭の河川から木製農具等の出土がみられ、拾六町ツイジ遺跡では弥生時代初頭の土壤から木製農具等が出土し、拾六町平田遺跡では家形土製品が出土している。また、平野奥部の東入部遺跡では夜臼式の大型壺を組み合わせた晩期末の埋葬施設が検出されている。

弥生時代になると遺跡数が増大するが、前期初頭には有田台地に環濠集落遺跡が出現する。この集落は200×300mの環濠を有する大規模なもので、早良平野における前期最大の集落である。このほか前期の遺跡としては、十郎川に面する沖積地上に位置する石丸古川遺跡があり、突帯文土器をはじめ多くの遺物が出土している。この時期の埋葬施設は有田遺跡をはじめ海岸部の藤崎遺跡、平野中央部の田村遺跡などで調査されている。前期末から中期初頭の集落遺跡は平野全域に拡大しており、埋葬施設は藤崎遺跡・吉武高木遺跡・東入部遺跡などにみられる。中期から後期の遺跡は野方中原遺跡、野方塚原遺跡、野方久保遺跡などが近隣では知られている。

古墳時代の集落遺跡は、平野の低地部や低位段丘部に戸切遺跡・湯納遺跡・拾六町ツイジ遺跡・四箇遺跡・原遺跡・田村遺跡・免遺跡・次郎丸高石遺跡・重留村下遺跡などがある。海岸の砂丘上には生ノ松原遺跡・西新町遺跡などがみられる。室見川の中流域西岸の山麓部から広がる中位段丘や下位面の残丘上には「早良王墓」といわれる吉武遺跡群や、野方中原遺跡・野方久保遺跡・羽根戸遺跡・太田遺跡・広石C遺跡・都地遺跡・金武城田遺跡・浦江遺跡・浦江谷遺跡がある。東岸の段丘や下位面残丘の台地上には有田遺跡・飯倉遺跡・野芥遺跡・梅林遺跡・東入部遺跡が分布しており、その上流に集落は展開していない。平野の東側丘陵部および西側丘陵において数多くの群集墳が調査されている。海岸部においては方形周溝の藤崎遺跡が調査され、平野部においては帆立貝式の櫛渡古墳や押塚古墳が調査されたほか、吉武遺跡群でも中期から後期の古墳群が調査されている。また、重留遺跡東側丘陵上の重留古墳C群の調査では6世紀前半の須恵器窯が検出されている。

古代から中世の遺跡も平野全体にみられる。現在、早良郡衙や郷家・郷倉が特定される遺構は確認されておらず、有田遺跡検出の大型建物群を早良郡衙と推定するにとどまっている。

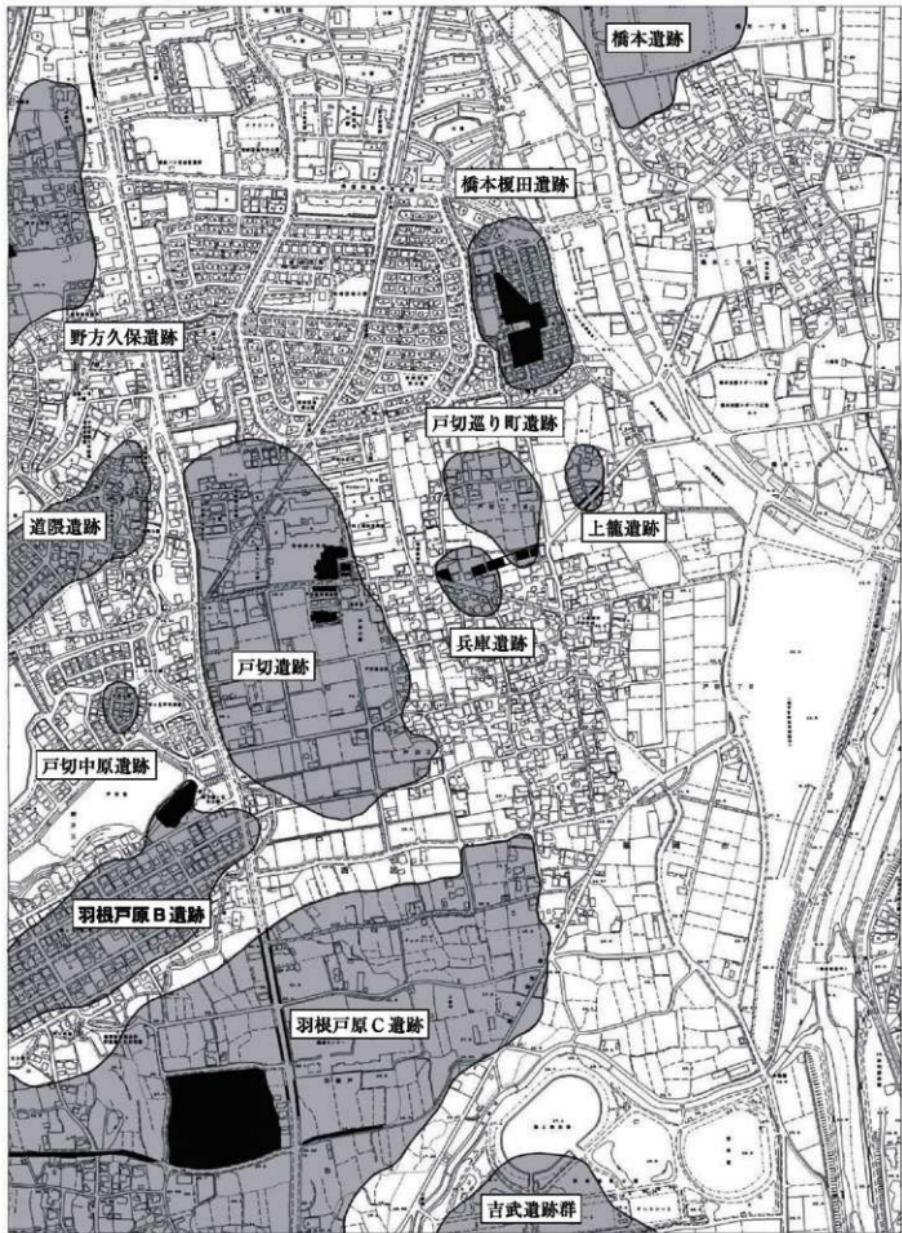


Fig. 1 周辺遺跡分布図(1/7,500)



Fig.2 羽根戸原遺跡第3次調査地点図(1/700)

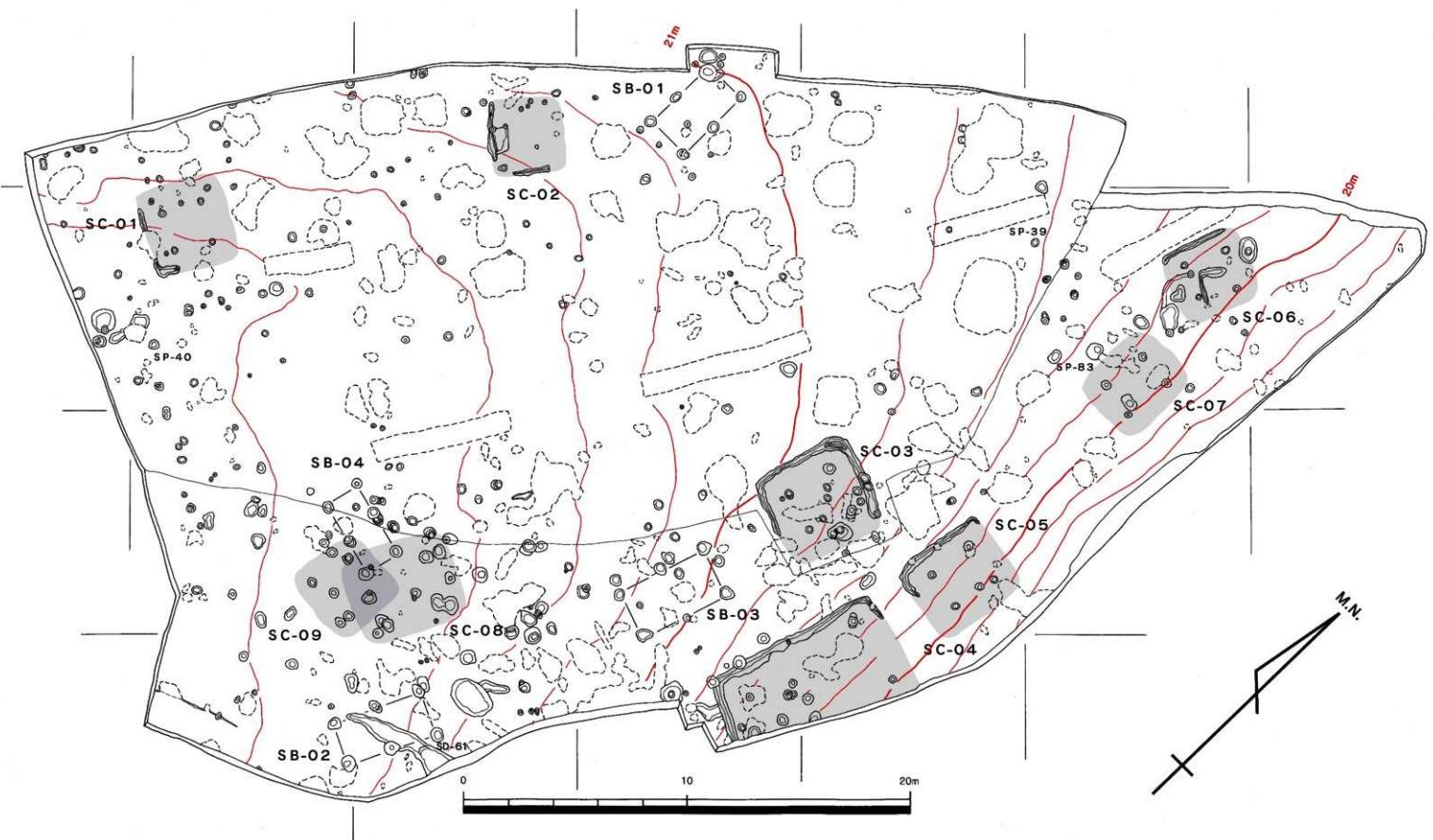


Fig. 3 羽根戸原遺跡第3次調査遺構配図(1/160)

第Ⅲ章 調査の記録

1. 調査の概要

今回の調査は、池際に位置する山林部分が対象地であり、その敷地面積は3,138m²であった。試掘調査では丘陵頂部にて遺構が確認されていることから、敷地内の高所部分から表土剥ぎ作業を開始した。遺構の密度は高くないものの裾部に至っても遺構の広がりが途切れないと、まず高所を調査し、終了後改めて裾部の調査を行った。結果、高所は後世の削平を強く受けしており、遺構の遺存は悪く、逆に裾部の方が遺構の遺存状況は良好であった。基本的な層序は、腐植土層を剥いだ直下の黄褐色粘質土が地山面となるが、裾部ではその間に茶褐色砂質土の堆積がみられた。竪穴住居9軒、掘立柱建物4棟、土坑、溝、多くの柱穴を検出した。

2. 遺構と遺物

竪穴住居（S C）

今回の報告では竪穴住居9軒を報告する。しかし、全体的に住居の遺存は悪く、住居壁の立ち上がりの一部を確認する程度であった。また、竪穴住居の主柱穴の可能性が考えられる1間×1間と認識される柱穴もここに含めている。その分布は、削平の程度差もあるが、斜面側の等高線に平行して掘削された住居が主体を成している。

SC-O1 (Fig.4, PL.4)

調査区の南西隅にて検出した。大きく削平を受けており、主柱穴と壁際を巡ると考えられる溝の一部のみを確認した。平面が約4×3.8mの隅丸の四角形を呈する竪穴住居に復元される。溝の幅は20～40cmである。主柱穴は4本で各柱穴には直径約25cmの柱痕跡が確認され、残存する深さは23～33cmであった。床面に炉などの性格を示す痕跡はみられなかった。出土遺物 (Fig.9, PL.8) 1は土師器甕の上半部破片である。口縁の約1/4が遺存し復元口径は22.0cmを測る。胎土はやや粗で径7mm以下の石英、長石を多量に含む。焼成はやや不良で、色調はにぶい橙色を呈する。器壁は摩滅しており器面調整は不明である他に土師器片が出土しているが図化できるものはない。遺構の時期は、出土遺物から古墳時代初頭ごろと考えられる。



調査前風景

SC-O2 (Fig.4, PL.4)

調査区の西側にて検出した。平面が隅丸の四角形を呈すると考えられる竪穴住居の壁際を巡る溝の一部のみを確認した。確認された溝の規模は幅約20～40cm、深さ3～8cmで、その一部に土坑が敷設されている。土坑の規模は60×110cm、深さ6cmである。主柱穴は不明で、床面に炉などの痕跡が見られないことから住居

跡以外の可能性も考えられる。出土遺物（Fig.9、PL.8）土坑から壺下半部の2が出土した。底径は5.7cmを測り、凸レンズ状にふくらむ。胎土はやや粗であり、径5mm以下の石英、長石を多く含んでいる。焼成はやや不良で、色調はにぶい褐色を呈している。土坑からは他に土師器の細片が出土しているが図化できるものはない。遺構の時期は、出土遺物から弥生時代後期後葉から終末ごろと考えられる。

SC-O3 (Fig.5, PL.4)

調査区の東側にて検出した。大きく削平を受けており、主柱穴と壁際を巡ると考えられる溝の一部のみを確認した。平面が約4.6×4.4mの隅丸の四角形を呈する竪穴住居と考えられる。溝の規模は幅20~40cm、深さ10~25cmであり、北西角は溝が二重になっており、掘り直されたと考えられる。主柱穴は4本で、残存する深さは25~40cmであった。床面に炉などの痕跡はみられなかった。出土遺物（Fig.9、PL.8）3は須恵器壺身の破片である。胎土は精良で、砂粒をほとんど含まない。焼成は良好で、外面は黒褐色、内面は灰色を呈している。4は須恵器壺の破片か。胎土は精良で、砂粒をほとんど含んでいない。焼成は良好で外面は黒褐色、内面は灰色を呈している。外器面は平行タタキ工具による擬格子紋、内器面にはあて具による同心円紋がみられる。遺構の時期は、出土遺物から古墳時代後期終わりごろと考えられる。

SC-O4 (Fig.6, PL.4)

調査区東側端にて検出した。遺構の大半は調査区外へ広がる。平面の一辺が約8mの隅丸の四角形を呈する大型竪穴住居と考えられる。検出面から住居の床面まで約8cmが残存しており、壁の際には小溝がめぐっている。確認された東辺の中央部床面には150×150cmの範囲に薄い炭化物の堆積層がみられ、炉跡と考えられる。検出範囲が狭く、主柱穴の本数など構造的なものは不明である。出土遺物（Fig.9、PL.8）遺物は5~9が出土した。5は壺上半部破片である。復元口径は20.3cmを測る。胎土は密で、径2mm以下の石英、長石を多量に含んでいる。焼成はやや不良で、色調は外面はにぶい褐色、内面は橙色から明褐色を呈する。外器面にはハケメ、胴部内面にはヘラケゼリ痕がみられる。6は甕口縁部破片である。復元口径は12.0cmを測る。胎土は密で、径4mm以下の石英、長石粒を含んでいる。焼成はやや不良で、色調は橙色を呈している。7は手づくねのミニチュア土器である。口径6.2cm、器高4.1cmである。胎土は密で、4mm以下の石英、長石粒を少量含んでいる。焼成は良好で、色調は橙色を呈している。8は手づくね成形の壺である。口径9.8~10.6cm、器高4.6cm、底径5.6cmである。胎土は密で、4mm以下の石英、長石、雲母を多量に含んでいる。焼成は良好で、色調は橙色からにぶい褐色を呈している。9は瓶把手部である。胎土は密で径4mm以下の石英、長石粒を多量に含み、径1mm以下の雲母を少量含んでいる。焼成は良好で、色調は橙色を呈している。遺構の時期は、出土遺物から古墳時代後期ごろと考えられる。

SC-O5 (Fig.5, PL.5)

調査区の東側端にて検出した。SC-O4、O3とは方向を一にし、近距離に配置されている。大きく削平を受けており、主柱穴と壁際を巡ると考えられる溝の一部のみを確認した。平面が約4.5×4.0mの隅丸の四角形を呈する竪穴住居と考えられる。溝の規模は幅20~40cm、深さ5cmである。主柱穴は4本で、残存する深さは23~39cmであった。床面に炉などの痕跡はみられなかった。出土遺物は、溝から摩滅した土器の小破片が数点出土している。遺構の時期は不明である。

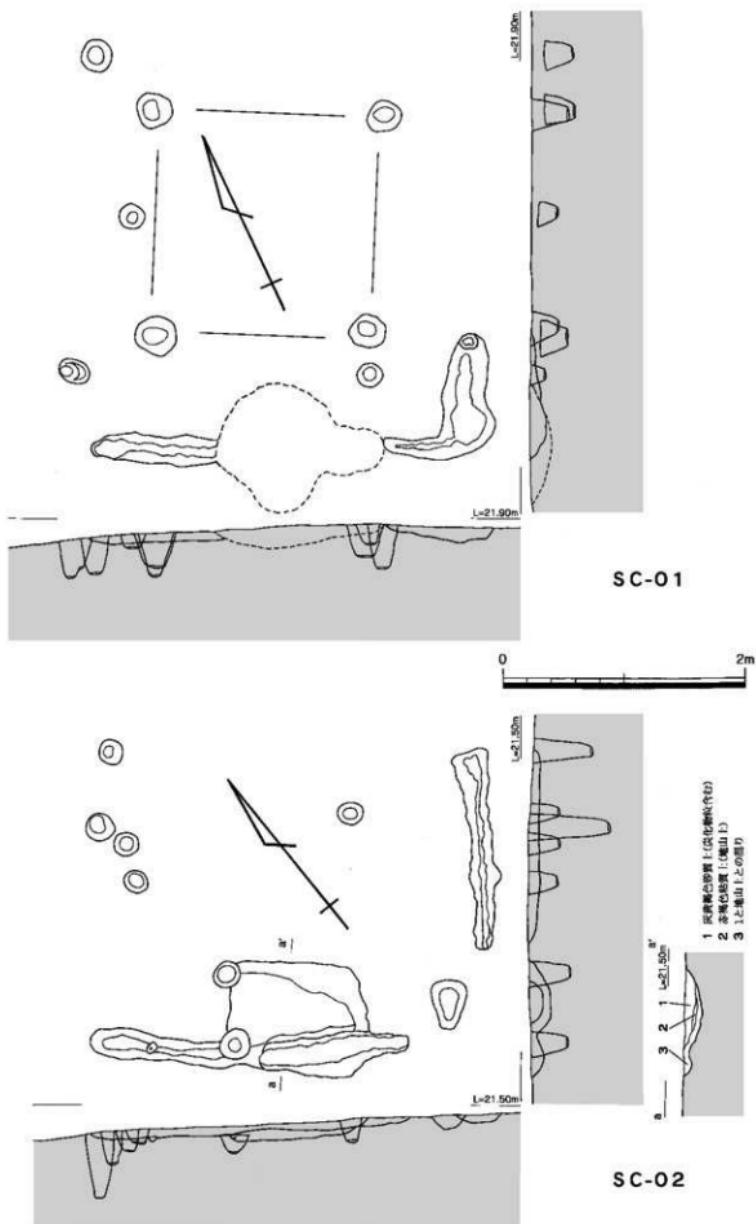


Fig. 4 SC-01, 02 遺構実測図(1/40)

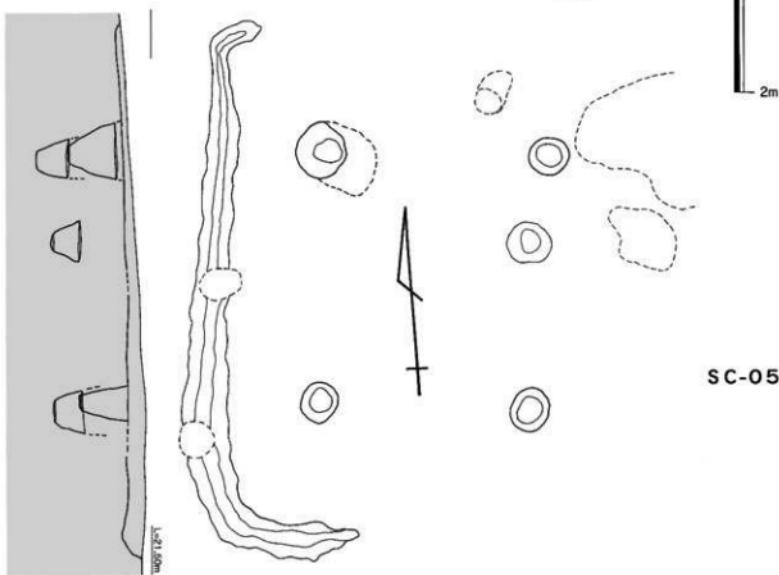
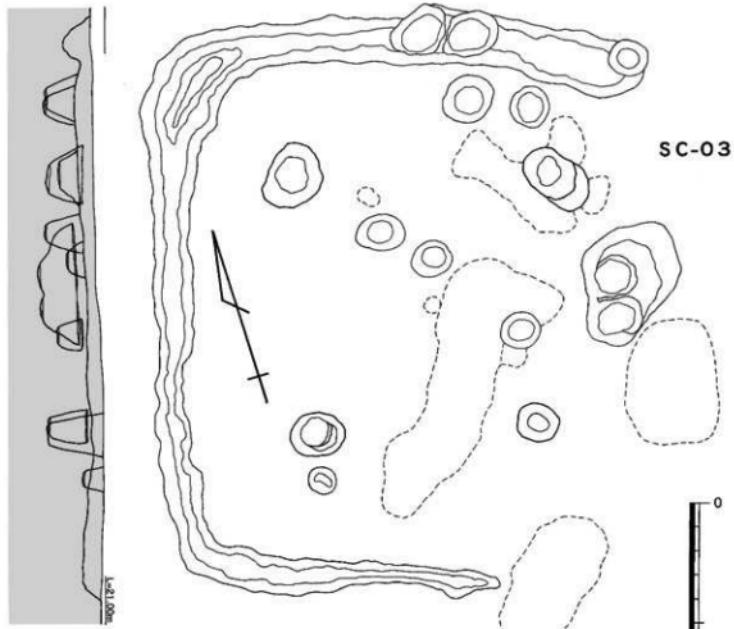


Fig. 5 SC-03, 05 道構実測図(1/40)

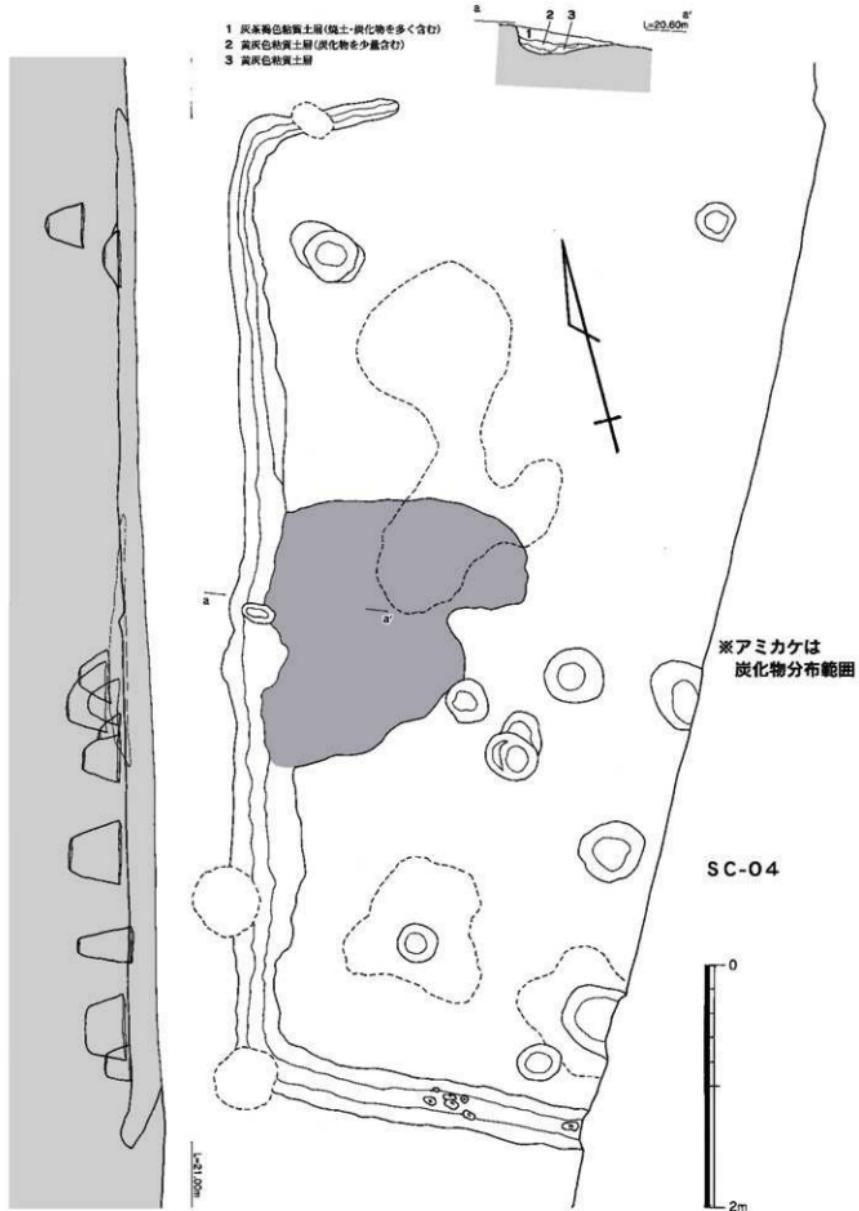


Fig. 6 SC-04 遺構実測図(1/40)

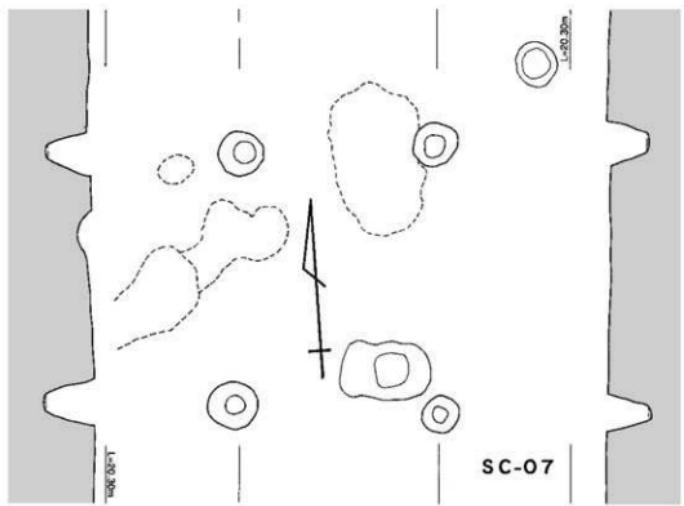
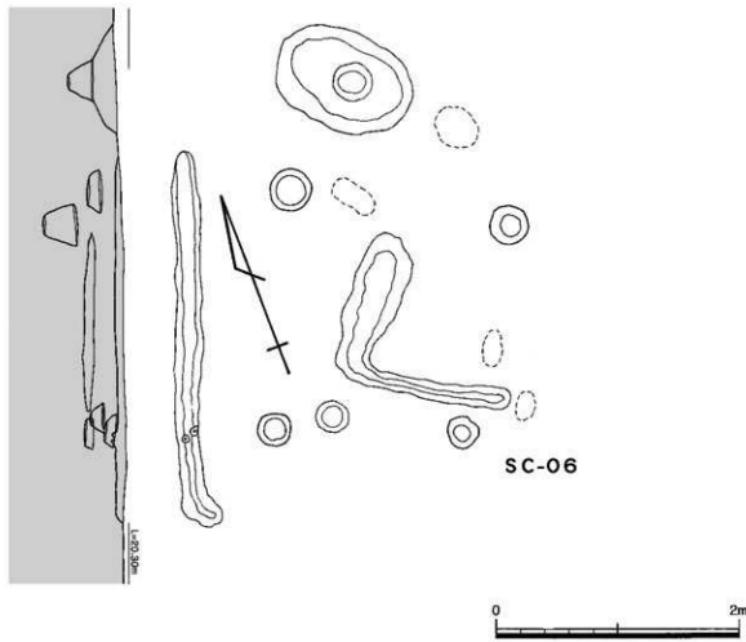


Fig. 7 SC-06, 07 遺構実測図 (1/40)

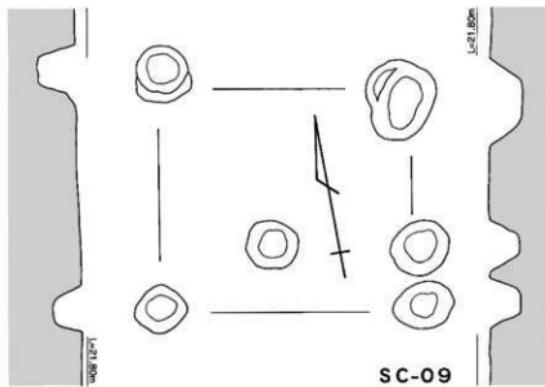
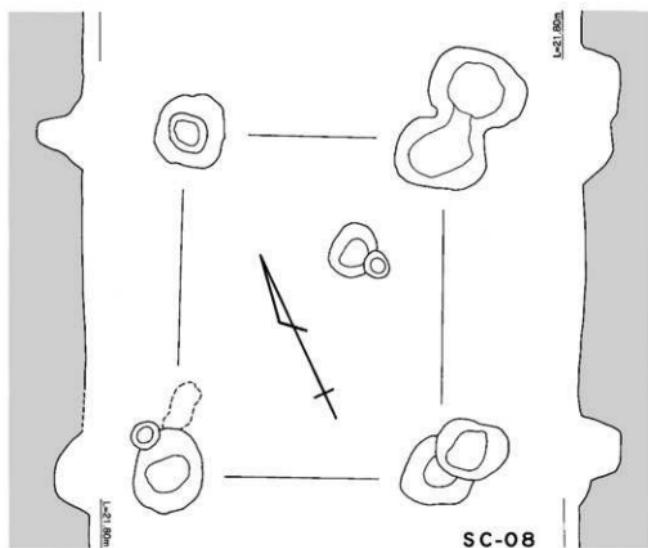


Fig. 8 SC-08, 09遺構実測図(1/40)

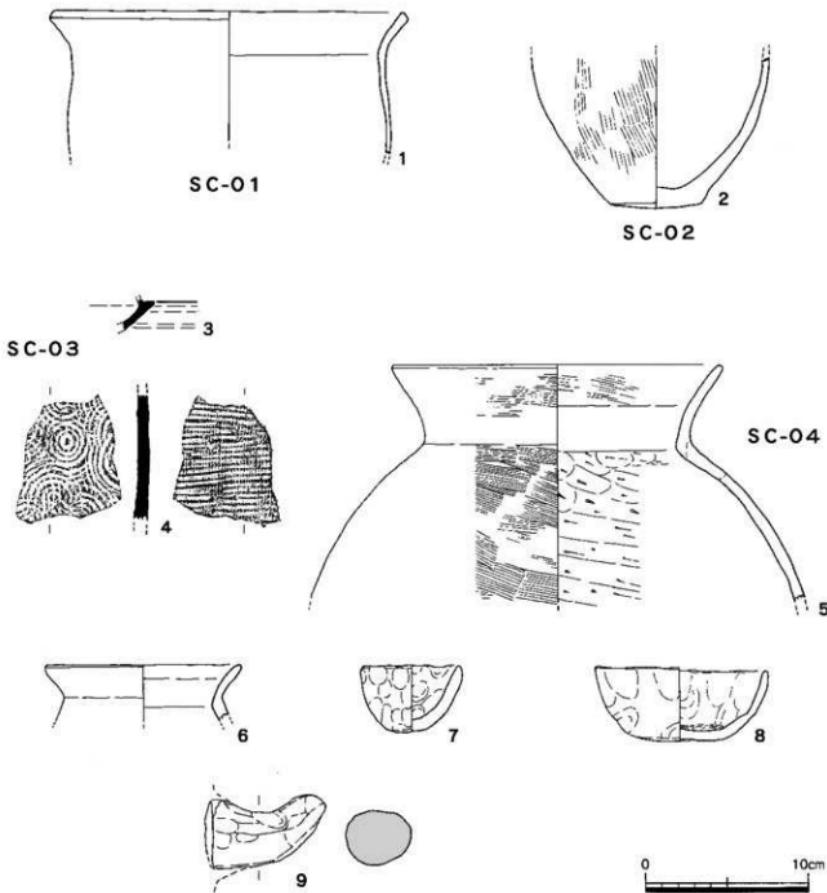


Fig. 9 SC出土遺物実測図(1/3)

SC-O6 (Fig.7, PL.5)

調査区の北側端にて検出した。大きく削平を受けており、主柱穴と壁際を巡ると考えられる溝の一部のみを確認した。平面が約 3.2×3.6 mの隅丸の四角形を呈する竪穴住居と考えられる。溝の規模は幅20cm、残存する深さ5cmである。主柱穴は4本で、残存する深さは7~26cmであった。床面に炉などの痕跡は見られなかった。出土遺物は、溝から摩滅した土器の小破片が数点出土している。遺構の時期は不明である。

SC-O7 (Fig.7, PL.5)

調査区の北東側にて検出した。黒褐色の埋土であり、遺構の壁面の立ち上がりなどから柱穴として掘削されたと考えられ、その配置から、大きく削平を受けている竪穴住居の主柱穴4本のみが遺存し

たものと考えた。残存する直径は30~40cmで、深さは25~40cmであった。床面に炉などの痕跡はみられなかった。柱穴から遺物は出土しておらず、遺構の時期は不明である。

SC-08 (Fig.8, PL.5)

調査区の南東側にて検出した。黒褐色の埋土であり、遺構の壁面の立ち上がりなどから柱穴として掘削されたと考えられ、その配置から、大きく削平を受けている竪穴住居の主柱穴4本のみが遺存したものと考えた。南西の1穴はSB-04と共有する。残存する直径は60~70cmで、深さは23~31cmであった。床面に炉などの痕跡はみられなかった。柱穴から遺物は出土しておらず、遺構の時期は不明である。

SC-09 (Fig.8, PL.5)

調査区の南東側にて検出した。SB-08と近接する。黒褐色の埋土であり、遺構の壁面の立ち上がりなどから柱穴として掘削されたと考えられ、その配置から、大きく削平を受けている竪穴住居の主柱穴4本のみが遺存したものと考えた。残存する直径は30~50cmで、深さは23~31cmであった。床面に炉などの痕跡は見られなかった。柱穴から遺物は出土しておらず、遺構の時期は不明である。

掘立柱建物 (SB)

今回の調査では、5棟の掘立柱建物と推定される遺構を検出した。ただし、遺構面が斜面であり、削平の違いから対応する柱穴が検出されにくいことを考慮し、明瞭な掘削を持つ柱穴の並びもこの内に含んだ。

SB-01 (Fig.10, PL.6)

調査区西侧にて検出された。方位をほぼ磁北にとる1間×2間の建物である。梁行2.1m、桁行3.5mであり、桁行の柱間は芯々で1.6~1.8mである。柱穴の直径は約30~80cm、深さは17~34cmである。**出土遺物 (Fig.14, PL.8)** 10は建物の南西隅のSP-29より出土した器台の破片である。復元底径は8.6cmである。胎土は密で、径4mm以下の石英、長石粒を少量含んでいる。焼成はやや不良で、色調はにぶい褐色を呈している。内面にはシボリ痕、外面には指オサ工成形の痕跡がみられる。遺構の時期は、出土遺物から弥生時代後期以降と考えられる。

SB-02 (Fig.10, PL.6)

調査区南東側にて検出された。方位をN-25°-E(磁北)にとる1間×2間の建物である。梁行2.0m、桁行4.2mであり、桁行の柱間は芯々で2.0~2.1mである。柱穴の直径は約40~70cm、深さは31~49cmである。柱穴から遺物は出土しておらず、遺構の時期は不明である。

SB-03 (Fig.11, PL.6)

調査区中央部東寄りにて検出された。方位をN-18°-E(磁北)にとる1間×2間の建物である。梁行2.3m、桁行4.3mであり、桁行の柱間は芯々で2.1~2.2mである。柱穴の直径は約35~60cm、深さは24~42cmである。柱穴から遺物は出土しておらず、遺構の時期は不明である。

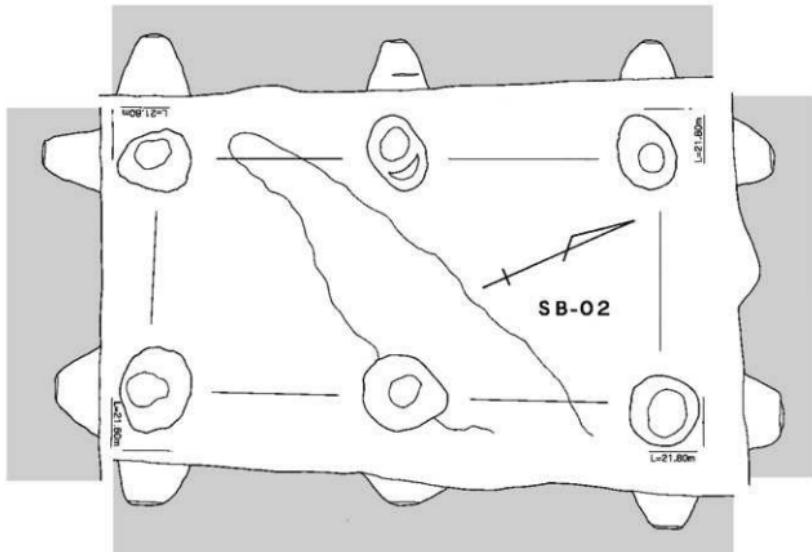
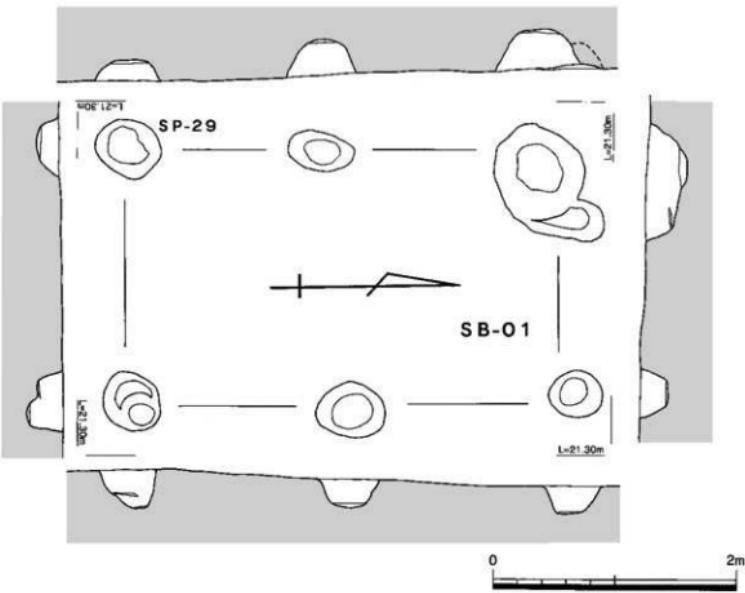


Fig.10 SB-01, 02 道構実測図(1/40)

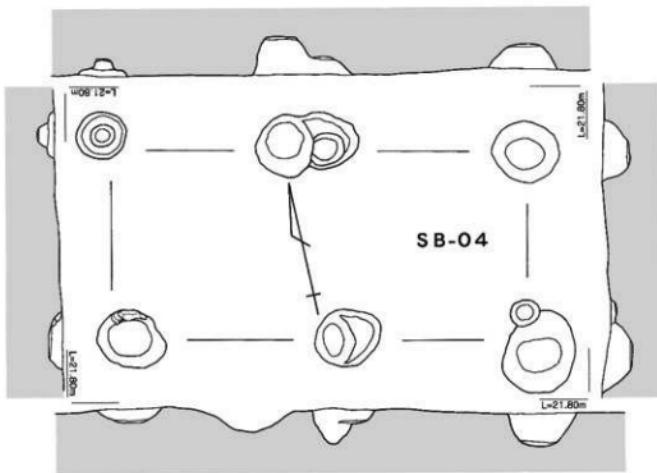
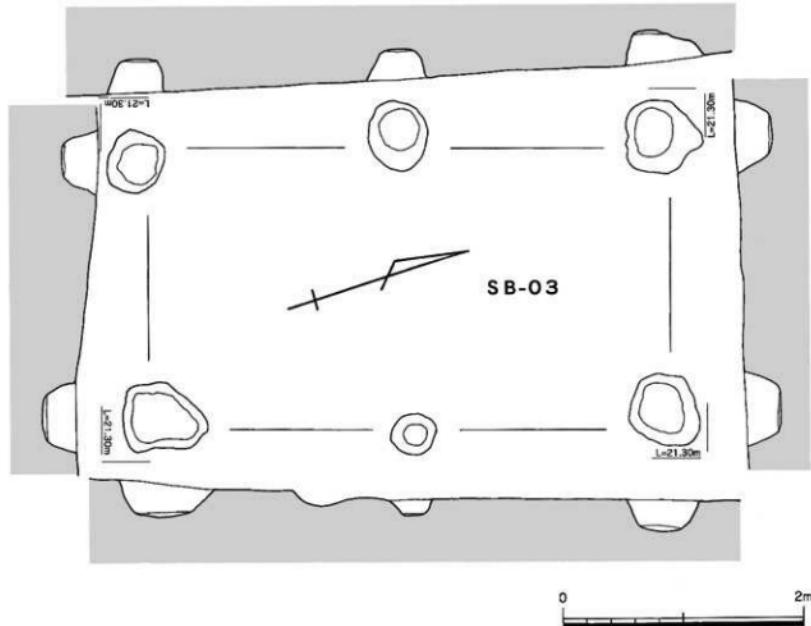


Fig.11 SB-03, 04遺構実測図(1/40)

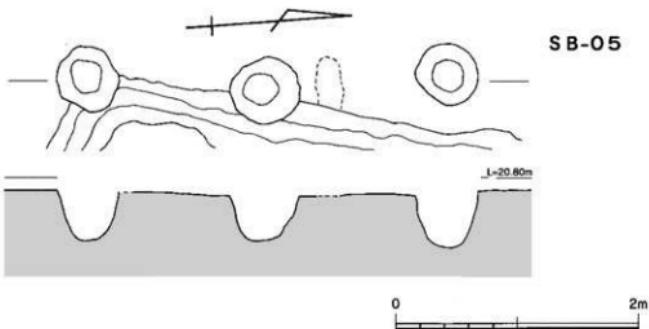


Fig.12 SB-O5 遺構実測図(1/40)

SB-O4 (Fig.11)

調査区中央部南寄りにて検出された。方位をN-77°-W(磁北)にとる1間×2間の建物である。梁行1.6m、桁行3.5mであり、桁行の柱間は芯々で1.7~1.8mである。柱穴の直径は約40~60cm、深さは10~27cmである。柱穴から遺物は出土しておらず、遺構の時期は不明である。

SB-O5 (Fig.12, PL.6)

調査区中央部、東端にてSC-O4と切り合う状況で確認された柱穴3穴が直線的に並ぶものである。方位をN-5°-E(磁北)にとる建物の柱列である。柱穴の平面形は円形で直径50cm前後である。残存する深さは40~50cmである。柱間は芯々で1.50mである。柱穴から遺物は出土しておらず、遺構の時期は不明である。

ピット状遺構 (S P)

今回の調査では、150穴を超えるピット状遺構を検出し、内96穴から遺物が出土した。その幾つかは掘立柱建物として認識されたものもあるが、立地が斜面であることもあり、多くは建物跡として確認されなかった。ここではピット内から遺物が出土したものを取り上げる。

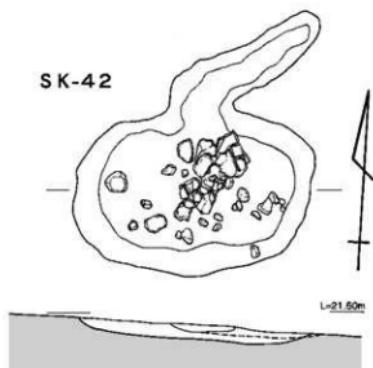


Fig.13 SK-42 遺構実測図(1/40)

S P-39 (Fig.3) 調査区北よりやや西側で検出された遺構である。平面形は円形を呈し、直径30cmを測る。残存する深さは約10cmである。出土遺物 (Fig.14, PL.8) 11は遺構の底面から出土した流紋岩製の砥石である。長辺の4面を砥石として利用している。最大長9.4cm、最大幅5.2cm、重さ300.71gである。色調は浅黄橙色を呈している。

S P-83 (Fig.3) 調査区北寄り、SC-O7の西側で検出された遺構である。平面形は梢円形を

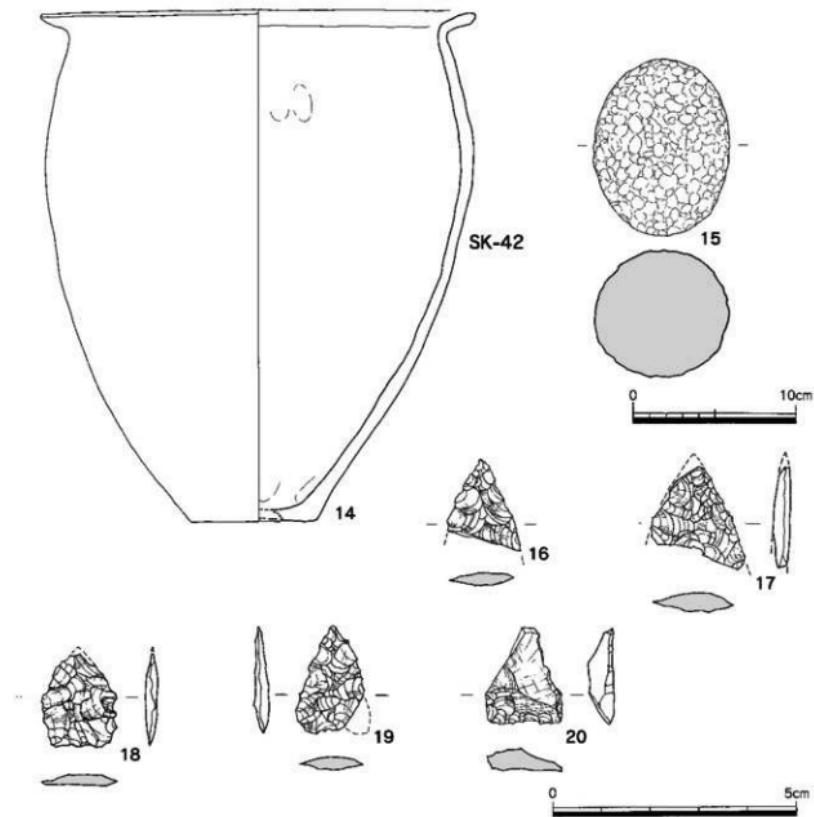
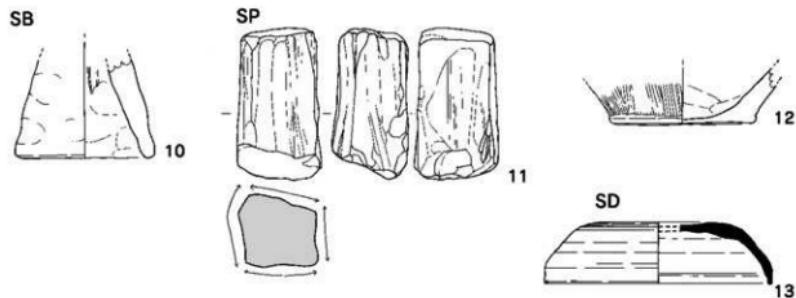


Fig.14 SB, SD, SK, SP, 表探遺物実測図(1/1, 1/3)

呈し、長軸75cmを測る。残存する深さは約35cmである。出土遺物（Fig.14、PL.8）12は蓋ないしは蓋の底部片である。復元される底径は9.1cmである。胎土はやや粗であり、径2mm以下の石英、長石粒を多量に含んでいる。焼成は良好で黒褐色を呈している。

他にS P - 4 O（Fig.3）のように柱穴の底面に小石を敷くものもみられた。

溝状遺構（S D）

今回の調査では、溝状を呈する遺構はあまり検出されていない。

S D - 6 1（Fig.3）調査区南端、調査区際にて検出された遺構である。平面形は不定形を呈し、東側に向けて立ち上がる。残存長4.8m、最大幅1.2m、残存する深さは約20cmである。出土遺物（Fig.14、PL.8）13は須恵器の坏蓋片である。復元される口径は14.0cm、器高3.7cmである。口唇部内面に段を有している。胎土は精良であり、径3mm以下の石英、長石粒を少量含んでいる。焼成は良好であり、色調は灰色を呈している。

土 坑（S K）

土坑状遺構には不定型のものが多く、出土遺物も少ない。ここでは、良好な遺物が出土したものだけを取り上げた。

S K - 4 2（Fig.13、PL.7）

調査区南側、東端にて検出した遺構である。平面形は梢円形を呈しており、長軸約2m、短軸1.4mを測る。残存する深さは約20cmであった。底面には幾つかの礫がみられ、その上面に甕がつぶれた状態で出土した。出土遺物（Fig.14、PL.8）14は甕である。復元される口径31.4cm、底径7.9cm、器高31.4cmである。胎土はやや粗であり、径6mm以下の石英、長石粒を多量に含んでいる。焼成はやや不良で、色調はにぶい褐色を呈する。15は敲打により成形された石器である。全面に敲打により卵形に成形された痕跡がみられる。色調は灰色で、最大長10.8cm、最大幅8.3cm、重量は986.24gである。

その他の遺物

調査時に遺物包含層や地表土などから黒曜石製の石鏃が出土している。（Fig.14、PL.8）16は基部を欠損しており、残存長19mm、残存幅15mm、厚さ2.5mm、重量0.45gである。17は基部を欠損しており、残存長21mm、残存幅20mm、厚さ4mm、重量1.18gである。18は先端部を若干欠損しており、残存長19mm、幅15mm、厚さ2.5mm、重量0.72gである。19は基部を欠損しており、残存長22mm、残存幅14mm、厚さ3.0mm、重量0.57gである。20は未製品と思われる。長さ20mm、幅16mm、厚さ5mm、重量1.21gである。

3.まとめ

今回の調査で検出された遺構は、弥生時代、古墳時代を含め竪穴住居9軒、掘立柱建物5棟、溝、土坑、柱穴群である。弥生時代では、藤ヶ丘団地の造成時にみられたと伝えられる甕棺墓は当該地までは拡がらず、後期の集落が営まれていたと思われる。また、古墳時代後期の住居には大型のものもみられ、羽根戸古墳群の形成を含め、集落構造を明らかにする上で貴重な資料を得ることができた。



調査地点遠景(航空写真) 2008(平成20)年2月19日撮影



1) 西側調査区全景(南西から)



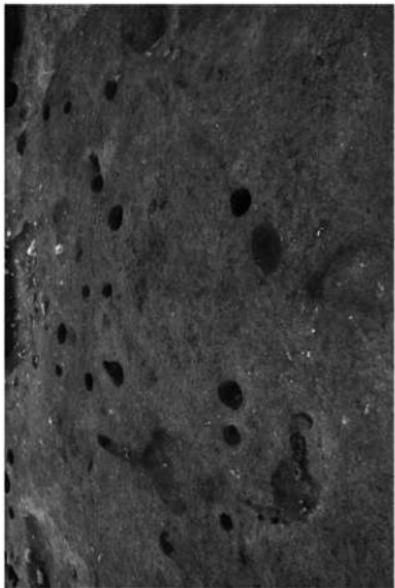
2) 西側調査区全景(北東から)



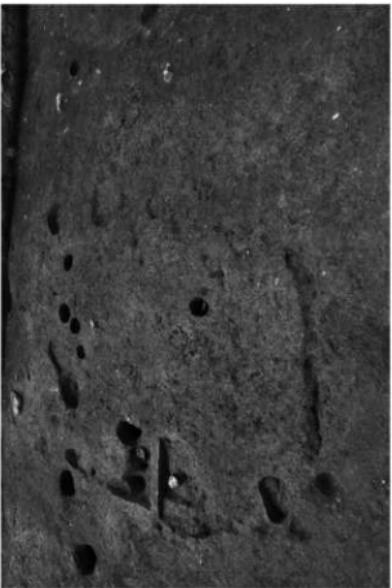
1) 東側調査区全景(南西から)



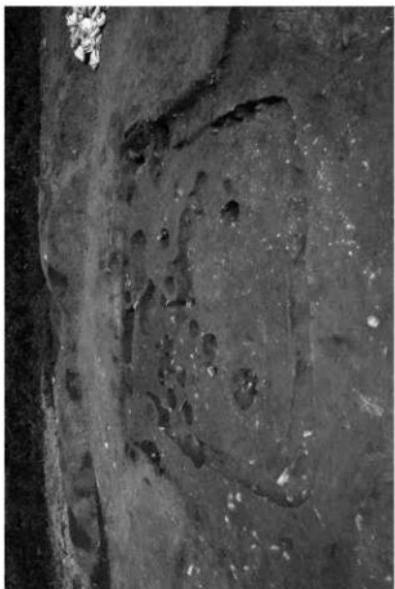
2) 東側調査区全景(北東から)



1) SC-O1 振削状況(南東から)



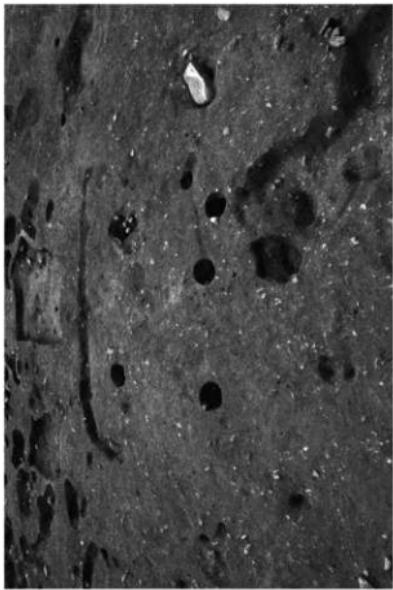
2) SC-O2 振削状況(南東から)



3) SC-O3 振削状況(西から)



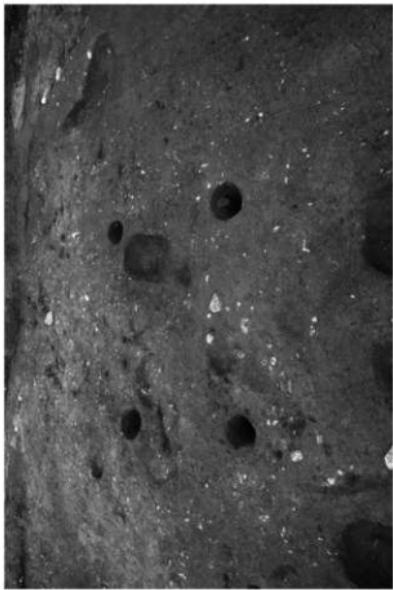
4) SC-O4 振削状況(南から)



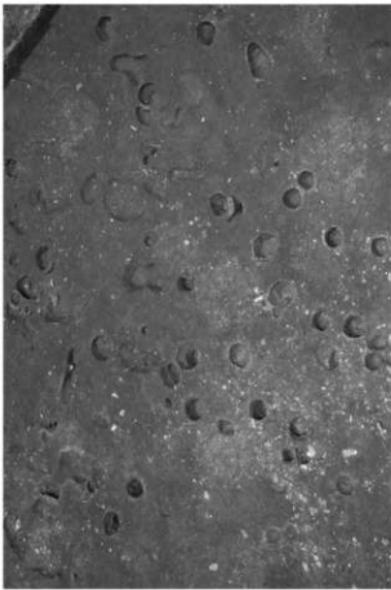
1) SC - 05 剥削状況(東から)



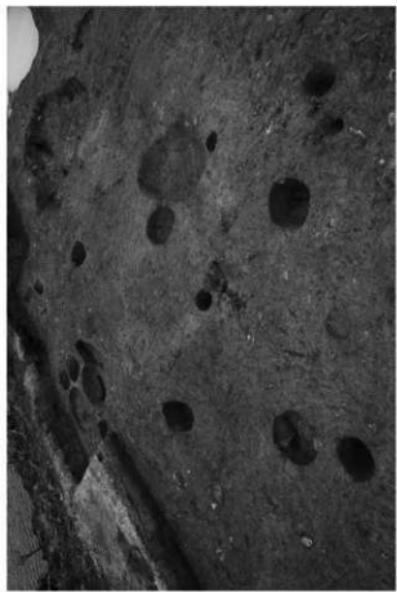
2) SC - 06 剥削状況(北から)



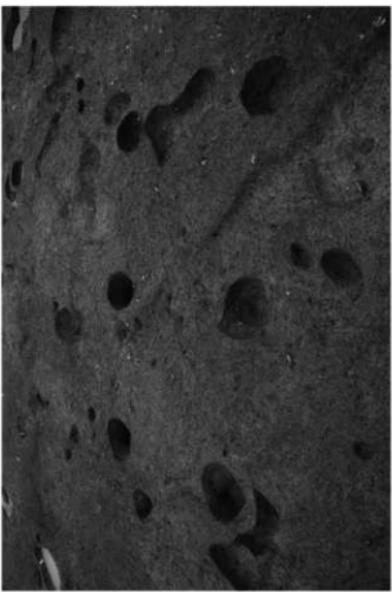
3) SC - 07 剥削状況(西から)



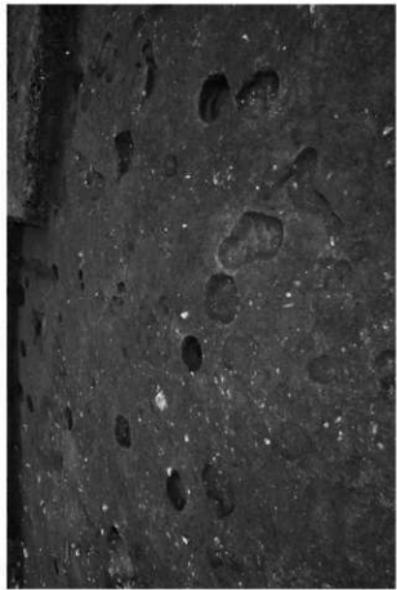
4) SC - 08, 09 剥削状況(南西から)



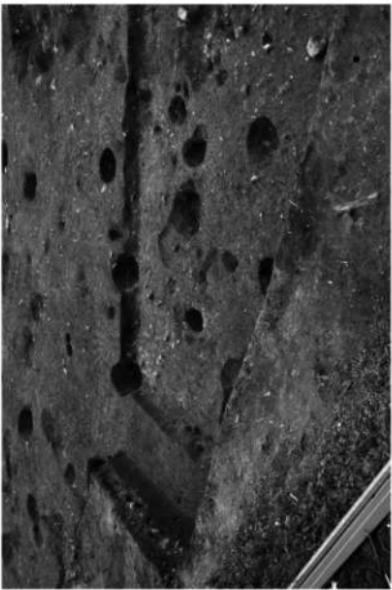
1) SB-O1 磨削状況(前から)



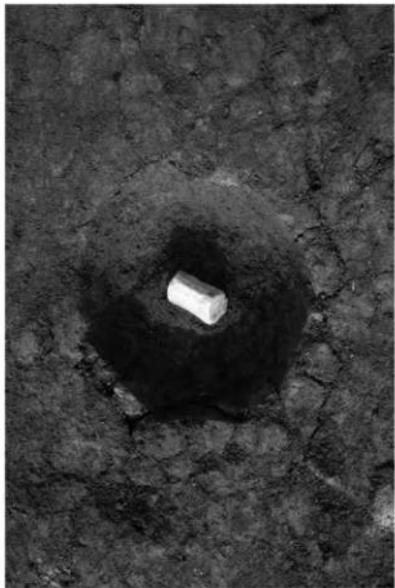
2) SB-O2 磨削状況(前から)



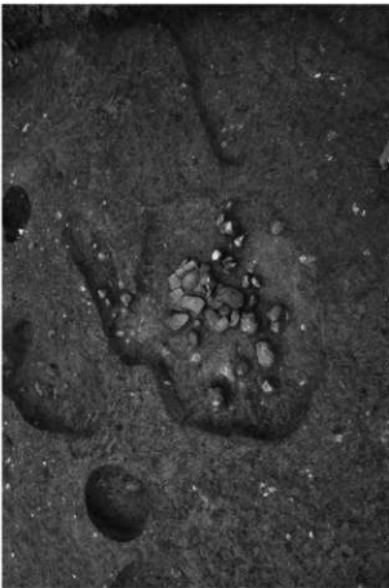
3) SB-O3 磨削状況(前から)



4) SB-O5 磨削状況(前から)



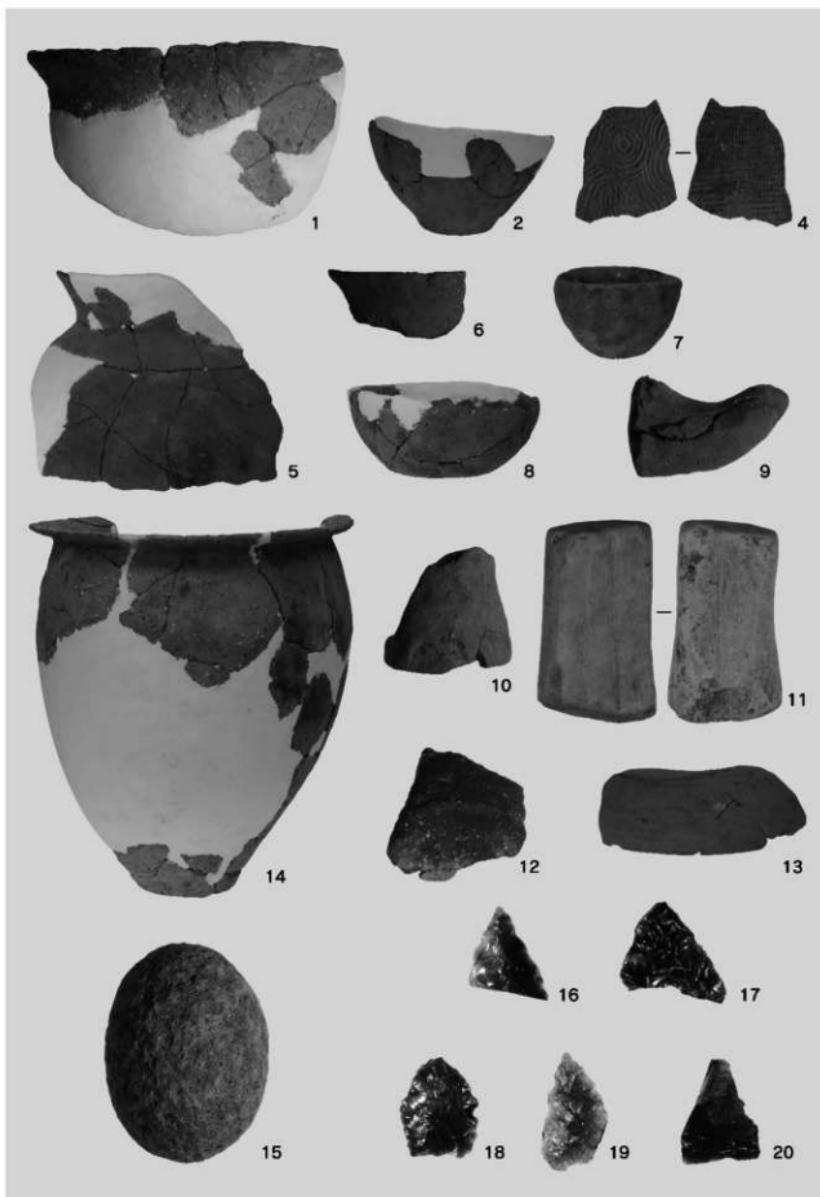
1) SP-39爆弾状況(南から)



2) SK-42爆弾状況(南から)



3) 昭和23年米軍撮影空中写真(USA-R236-46の一部を使用)



出土遺物(縮尺不統一)

— 報告書抄録 —

書名	羽根戸原B 1
ふりがな	はねどばるB 1
副書名	— 第3次調査の報告 —
巻次	
シリーズ名	福岡市埋蔵文化財調査報告書
シリーズ番号	第1095集
編著者名	加藤隆也
編集機関	福岡市教育委員会
発行機関	福岡市教育委員会
発行年月日	20100323
作成法人ID	40130
郵便番号	810-8621
住所	福岡市中央区天神1-8-1
遺跡名	羽根戸原B遺跡
ふりがな	はねどばるBいせき
遺跡所在地	福岡市西区野方3丁目212、213番1、218番1、637番2
市町村コード	40130 遺跡番号0398
北緯	33° 32' 59"
東経	130° 18' 45"
調査期間	20080425～20080704
調査面積	1,402m ²
調査原因	宅地造成
種別	集落
主な時代	弥生時代、古墳時代
遺跡概要	竪穴住居、掘立柱建物、土坑、溝
特記事項	丘陵の尾根線上から東側緩斜面にかけ、弥生後期から古墳時代の集落を検出



調査終了後風景(2009年10月28日撮影)

羽根戸原B 1

—第3次調査の報告—

福岡市埋蔵文化財調査報告書 第1095集

平成22年3月23日

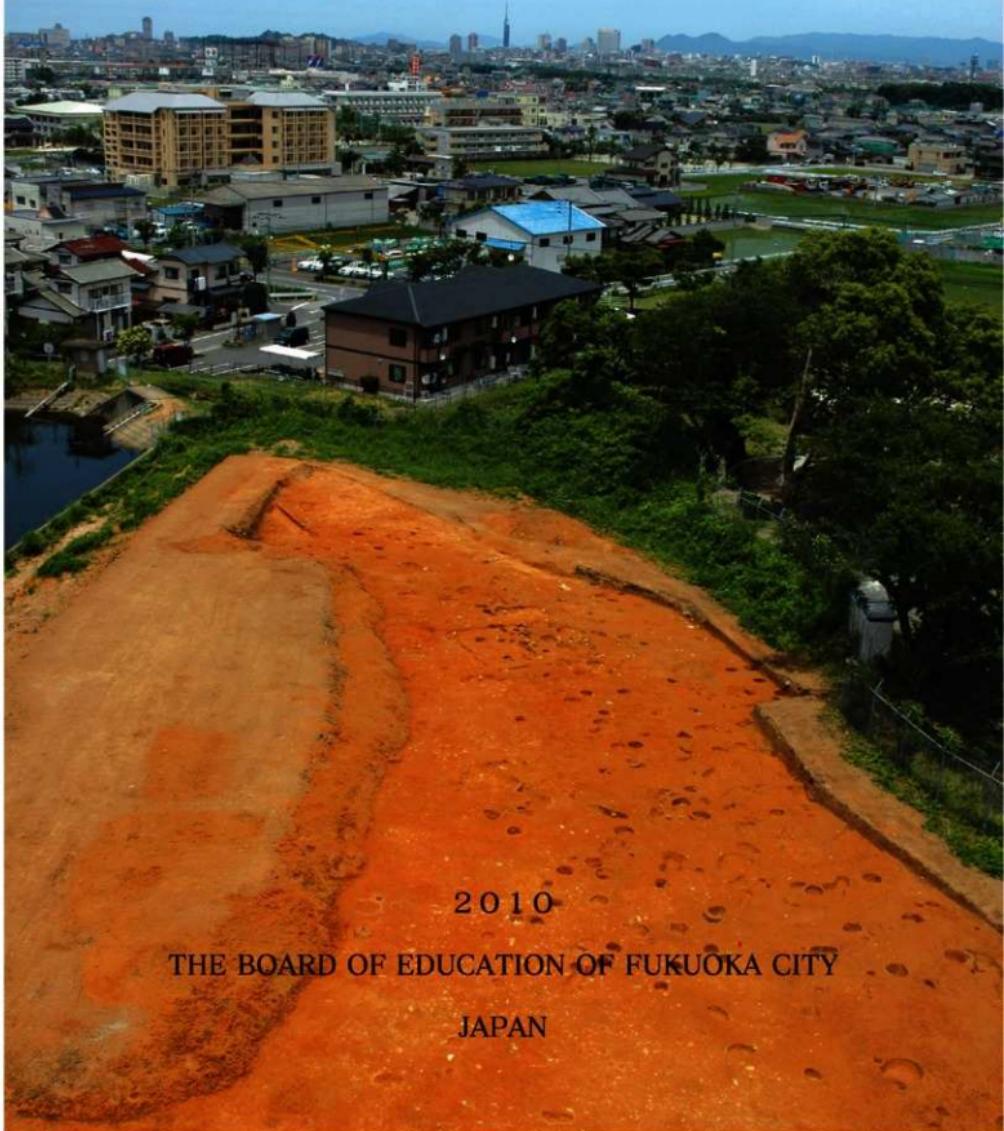
発行 福岡市教育委員会
福岡市中央区天神1丁目8-1
☎ 092(711)4667

印刷 株式会社ハザマ印刷
福岡市南区那の川1-20-23
☎ 092(521)5138

HANEDOBARU B 1

— Results of the 3rd excavation of Hanedobaru B Sites —

Report of Archaeological Investigations of Fukuoka city, Vol.1095



2010

THE BOARD OF EDUCATION OF FUKUOKA CITY

JAPAN